

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780343

研究課題名(和文)個人主義の社会的機能と民主主義的集団意思決定

研究課題名(英文)Social functionality of individualism and democratic decision-making

研究代表者

竹村 幸祐 (Takemura, Kosuke)

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：20595805

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、個人主義の社会的機能を明らかにすることを目的として実施された。漁業者と非漁業者を比較した研究1aは、漁業者において特に個人主義と協力行動が正の相関を示しやすいことを明らかにした。研究1bは、民主主義的な集団と上下関係の厳しい集団を比較し、前者で特に個人主義と情報共有行動が正の相関を示しやすいことを明らかにした。これらの知見は、協力行動が不確実性対策としての側面を持つ時、個人主義が必要とされることを示唆している。研究2は住居流動性と協力行動の関係を分析し、ここでも「個人の判断」がコミュニティ内の協力を支える役割を担っていることが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the current project was to understand how individualism functions in social life. Studies 1a and 1b investigated the correlations between individualism and cooperative behaviors. It was found that individualism was more positively correlated with cooperative behavior when decision makers needed to reduce uncertainty involved in resource acquisition (Study 1a). Also, individualism was more positively correlated with information sharing (i.e., cooperative behavior for group decision making) in democratic groups than in hierarchical groups (Study 1b). These findings suggest that individualism (or independence of individuals) plays roles in promoting group performance. Study 2 found that 1) people cooperate for community when they expect other community members cooperate (i.e., conditional cooperation), and 2) in mobile (vs. stable) communities, people's expectations on others' cooperation are sustained by others' internal traits, not by external controls (e.g., norms).

研究分野：社会心理学

キーワード：個人主義 協力行動 集団意思決定 不確実性 共有

1. 研究開始当初の背景

集団主義・個人主義(および、相互協調性・相互独立性)は、文化心理学の中心概念としての役割を担ってきた。この概念が提唱されて以来、様々な比較文化研究が実施され、心理・行動傾向における文化的多様性が明らかにされてきた。こうした数々の研究は、人間の心理・行動が、人間自身が社会生活の中で集合的に作り出す文化の影響を受けていることを示しており、社会的動物としての人間理解を促進してきた。

しかし同時に、新たな謎も浮き彫りになってきた。そのひとつが、個人主義的な「社会」の成立である。個人主義、すなわち、他者との関係性よりも「個」としての自己を重視する傾向を持つ人々の集合は、果たしてどのようにして社会として成り立っているのだろうか。

本研究は、従来の文化心理学が十分に扱いきれなかった「個人主義の社会的機能」の解明を目指した。それにあたり、協力行動の生起における「個人の判断」の役割に特に注目した研究1・2を実施した。

2. 研究の目的

研究1(研究1a・1b)では、個人主義的傾向が2種類の協力行動とどのような関係を持つかに焦点を当てた。ひとつが資源の共同分配への協力で、もうひとつが集団意思決定への協力であった。これらはいずれも、不確実性に対する集合的対処のための協力行動である。前者は個人が獲得した資源を、後者は個人の情報・判断を、集団のレベルでプールすることで不確実性を集合的に低減させるものである(Kameda, Takezawa, Tindale, & Smith, 2002; Kameda, Tsukasaki, Hastie, & Berg, 2011)。

研究1は、この集合的不確実性低減において個人主義が果たす役割に注目した。資源や情報のプールにより不確実性を低減させるには、集団メンバーが個人主義的傾向を持ち、相互に独立に判断・行動する必要があると考えられる。相互に独立に判断しなければ、判断のエラーがメンバー間で共有されてしまう。そうなると、集団のレベルでプールしても、エラーが相殺されない。ここから、「個人の判断」こそが、集合的不確実性低減を支えていると考えることができる。

以上の仮説に基づき、研究1は次の2点を検討した。第一に、資源共有により不確実性低減を図る必要がある者(e.g., 漁業者)と相対的にその必要性が低い者を比較した(研究1a)。資源獲得において不確実性に直面しやすい者ほど、協力行動と個人主義が正の相関関係を示しやすいと予測される。第二に、トップダウン型の意思決定を行う集団と民主主義的に意思決定を行う集団を比較した(研究1b)。民主主義的な意思決定を行う集団においては、集団意思決定への協力行動(e.g., 情報の収集と共有)と個人主義が正の相関関

係を示しやすいと予測された。

研究2では、他者による「個人の判断」が自己の協力行動にどのような影響を及ぼすかを検討した。協力行動に関する心理学研究では、古くから、「他者による協力行動への期待」が重要な役割を果たすことが知られている(e.g., Pruitt & Kimmel, 1977)。本研究は、どのような時に他者の協力を期待するかがコミュニティの流動性によって異なる可能性に注目した。特に、流動性が高い時には他者の自発的協力行動(i.e., 個人の判断に基づく協力行動)への期待が重要になるとの可能性を検討した。

まず、他者の協力を期待させる基盤のひとつとして、フリーライドに対する監視と制裁が考えられる(Shinada & Yamagishi, 2007)。フリーライドした者が発見され、そしてコミュニティからの排斥などの制裁が加えられるのであれば、(自分だけでなく)コミュニティ内の他者も協力するだろうと期待できる状況となる。ただし、こうした外的コントロールが十分に機能するのは、流動性の低い時に限定されると指摘されている(Su et al., 2016)。流動性が高い時、コミュニティからの排斥はフリーライダーにとって十分な脅威とならない(山岸・吉開, 2009)。そこで、流動性の高い状況では、他者の自発的な協力行動、すなわち他者の「個人の判断」に基づく協力行動を期待できる時にこそ、自己も協力行動を取りやすいと考えられる(山岸, 1998)。これは、コミュニティの流動性が高い時には、外的コントロールをもって社会秩序を形成することに限界があり、「個人の判断」こそが重要な役割を果たすとする見解である。研究2ではこの仮説を実験で検証した。

3. 研究の方法

研究1aは、西日本の34集落で郵送調査を実施した。回答者の中には漁業者・養殖漁業者・農業者・その他の職業に就く者が含まれた。このうち、資源獲得上の不確実性が最も高いのは漁業者であり、漁業者と非漁業者を比較した。

研究1bでは、上下関係がはっきりしていてトップダウンで意思決定を行う集団と、民主主義的に意思決定を行う集団を比較した。前者の集団として大学生の体育系クラブ・サークル、後者の集団として文化系クラブ・サークルを位置づけ、それぞれを対象とした質問紙調査を実施した。

研究2では、WEB上でシナリオ実験を行った。この実験では、自己の流動性の高低ならびにコミュニティ内他者の流動性の高低が操作された(i.e., 計4種類のシナリオ)。自他の流動性についてのマインドセットを操作した後、コミュニティへの協力行動、コミュニティにおける協力規範の知覚、コミュニティ内他者への信頼を測定し、その関係を分析した。

4. 研究成果

(1) 研究 1a

調査方法：西日本 34 コミュニティで郵送調査を実施した。3 府県 21 市町村 33 コミュニティの 215 人から有効回答が得られた（回収率 12%）。この中には漁業者（養殖漁業者を除く）が 39 人、農業者が 85 人含まれていた。調査では、コミュニティ内での協力行動、個人主義傾向などが測定された。

結果：漁業者において、コミュニティ内での協力行動と個人主義傾向が正の相関（ $r = .47$ ）を示した。一方、農業者（ $r = .24$ ）およびその他（ $r = -.06$ ）での相関関係はこれより弱いものであった（マルチレベル分析で検討した結果は表 1）。

表 1. コミュニティ内での協力行動を目的変数としたランダム切片モデル（レベル 1 は個人、レベル 2 はコミュニティ）

	<i>b</i>	<i>p</i>
個人主義	0.16	0.145
相互協調性	-0.10	0.020
漁業者ダミー	0.02	0.927
養殖漁業者ダミー		
農業者ダミー	0.08	0.702
個人主義 × 漁業者	0.78	0.035
個人主義 × 養殖漁業者		
個人主義 × 農業者	0.23	0.385
相互協調性 × 漁業者	-0.79	< .001
相互協調性 × 養殖漁業者		
相互協調性 × 農業者	-0.09	0.734
女性ダミー	0.22	0.025
年齢	-0.01	0.013
世帯規模	0.00	0.207
等価世帯所得	0.00	0.605

(2) 研究 1b

調査方法：国立大学の学生グループ（クラブ・サークル）で質問紙調査（回答は WEB 上）を実施した。各グループでの所属期間が 1 年以上の者のみを分析対象とした。計 31 グループ 92 人からの回答が分析対象となった。このうち、体育系が 18 グループ 63 人、文化系が 13 グループ 29 人であった。調査では、情報探索・共有（集団意思決定への協力行動）、個人主義傾向などが測定された。

結果：文化系グループにおいて、情報探索・共有と個人主義傾向が強い正の相関（ $r = .76$ ）を示した。一方、体育系グループではこれより弱い正の相関（ $r = .28$ ）が見られた（マルチレベル分析で検討した結果は表 2）。

以上の研究 1a・1b の結果は仮説を支持しており、個人が獲得した資源・情報を集団レベルでプールして不確実性低減を図る際に、「個人の判断」を重視する個人主義が求められていることを示している。

表 2. 情報探索・共有を目的変数としたランダム係数モデル（レベル 1 は個人、レベル 2 はグループ）

	<i>b</i>	<i>p</i>
個人レベル		
個人主義	0.23	0.289
相互協調性	0.18	0.483
男性ダミー	-0.26	0.216
リーダー・ダミー	1.06	< .001
グループレベル		
文化系グループ・ダミー	0.22	0.642
クロス水準交互作用		
個人主義 × 文化系	0.74	0.002
相互協調性 × 文化系	0.13	0.687

(3) 研究 2

調査方法：インターネット調査会社を通じて 304 人から有効回答を得た。参加者は α 自己流動性：低 vs. 高) × α (他者流動性：低 vs. 高) の 4 条件に無作為に配置された。

参加者はまず、流動性（住居流動性）のマインドセットを操作する記述課題（Oishi et al. [2012] をベースに作成）に取り組んだ。この課題では、ある町内で理想の仕事に就いたとして、その後の生活を想像して記述するよう求められた。自己高流動条件では、その仕事に就くためにその町内に越してきたばかりであり、2 年後にまた引越すことを想像するよう求められた。これに対し、自己低流動条件では、長年住んできた町内でその仕事に就き、最短でも 10 年そこに住み続けることになるように想像するよう求められた。この操作と直交する形で、周囲の他者の流動性も操作された。他者高流動条件では、その町内では転入・転出する人が多いと想像するよう求められた。他者低流動条件では、その町内では引越す人が滅多にいないと想像するよう求められた。

この操作の後、参加者は、現実に住んでいるコミュニティでの協力行動についての項目、協力規範知覚の項目、コミュニティ信頼の項目に回答した。

結果：重回帰分析の結果（表 3）他者流動性が高い時にコミュニティ内信頼と協力行動の正の関連が強くなることが確認された。これに対し、協力規範知覚と協力行動の正の関連は、他者流動性が高い時に弱くなった。以上の結果は、コミュニティの流動性が高い時には、外的コントロールをもって社会秩序を形成することに限界があり、「個人の判断」への信頼こそが協力行動の基盤となるとする仮説を支持するものである。

表 3. コミュニティへの協力行動を目的変数とした重回帰分析

	b	p
協力規範知覚	0.14	.003
コミュニティ信頼	0.55	< .001
自己流動性 (操作: -1=低、+1=高)	0.08	.021
他者流動性 (操作: -1=低、+1=高)	-0.01	.659
年齢	0.01	< .001
性別(0=男性、1=女性)	0.11	.140
協力規範知覚 × 自己流動性	0.00	.918
コミュニティ信頼 × 自己流動性	-0.02	.719
協力規範知覚 × 他者流動性	-0.11	.013
コミュニティ信頼 × 他者流動性	0.10	.020
自己流動性 × 他者流動性	-0.01	.783
協力規範知覚 × 自己流動性 × 他者流動性	-0.06	.181
コミュニティ信頼 × 自己流動性 × 他者流動性	-0.01	.830

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 14 件)

- 1) Takemura, K. (2014). Being different leads to being connected: On the adaptive function of uniqueness in "open" societies. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45, 1579-1593. 査読有
- 2) Takemura, K., Uchida, Y., & Fujino, M. (2014). Extension officers as social coordinators: Comparisons between agricultural and fishing communities in Japan. *Psychologia*, 57, 245-258. 査読有
- 3) Uchida, Y., & Takemura, K. (2014). Editorial: Regional Communities. *Psychologia*, 57, 225-228. 査読なし
- 4) Ida, T., Takemura, K., & Sato, M. (2015). Inner conflict between nuclear power generation and electricity rates: A Japanese case study. *Energy Economics*, 48, 61-69. 査読有
- 5) Falk, C. F., Heine, S. J., Takemura, K., Zhang, C. X. J., & Hsu, C.-W. (2015). Are implicit self-esteem measures valid for assessing individual and cultural differences? *Journal of Personality*, 83, 56-68. 査読有
- 6) 笹川果央理・竹村幸祐・内田由紀子 (2015). 自己価値の随伴性と従業員の心理的健康 ストレス科学研究, 30,

131-137. 査読有

- 7) Takemura, K., Hamamura, T., Guan, Y., & Suzuki, S. (2016). Contextual effect of wealth on independence: An examination through regional differences in China. *Frontiers in Psychology*, 7, Article 384. 査読有
- 8) Fujiwara, K., Takemura, K., & Suzuki, S. (2016). When a smile does no good: Creativity reduction among avoidance- vs. approach-oriented individuals in dyadic interactions. *International Journal of Innovation Management*, 20, 1640007. 査読有
- 9) Lu, M., Hamamura, T., Doosje, B., Suzuki, S., & Takemura, K. (2017). Culture and group-based emotions: Could group-based emotions be dialectical? *Cognition and Emotion*, 31, 937-949. 査読有
- 10) Takemura, K., & Suzuki, S. (2017). Self-expression and relationship formation in high relational mobility environments: A study of dual users of American and Japanese social networking sites. *International Journal of Psychology*, 52, 251-255. 査読有
- 11) Norasakkunkit, V., Uchida, Y., & Takemura, K. (2017). Evaluating distal and proximal explanations for withdrawal: A rejoinder to Varnum and Kwon's "The ecology of withdrawal." *Frontiers in Psychology*, 8, Article 2085. 査読有
- 12) 笹川果央理・中山真孝・内田由紀子・竹村幸祐 (2017). メンタルヘルス不調による休職者の自己価値の随伴性 心理学研究, 88, 431-441. 査読有
- 13) 竹村幸祐・内田由紀子・福島慎太郎 (2017). 生業グループの社会関係資本と普及指導員の活動: 農業者グループおよび漁業者グループのリーダー調査による検討 農業普及研究, 45, 79-92. 査読有
- 14) 鈴木智子・竹村幸祐・浜村武 (2018). 結果またはプロセス重視のサービス・リカバリーに対する評価と行為同定の関係 流通研究, 21, 67-75. 査読有

[学会発表](計 34 件)

- 1) Heine, S., Cheung, B. Y., & Takemura, K. (2014, July). Cultural influences on sleep in Japan and Canada. Paper presented at the 22nd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Reims, France.
- 2) Takemura, K. (2014, July). Two types of collectivism: Intragroup relationship orientation in Japan and intergroup

- comparison orientation in the United States. In M. Boiger (Chair), Beyond the familiar dichotomy of individualism and collectivism. Symposium conducted at the 22nd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Reims, France.
- 3) 竹村幸祐 (2014). 個人主義を支える集合的豊かさ: 中国 31 省のデータによる検討 日本社会心理学会第 55 回大会ワークショップ「『文化』の単位を問う: 地域・生業・国家比較を通じた検証」(企画: 内田由紀子・竹村幸祐) (北海道大学)
 - 4) Suzuki, S., & Takemura, K. (2014, September). The internationalization process of the high-context communication services. Paper presented at the 2nd International Conference on Serviceology, Yokohama, Japan.
 - 5) 竹村幸祐・藤原健・鈴木智子 (2014). 異文化経験は社会的相互作用の中で創造性を高めるか? 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 203. *ポスター発表(同志社大学)
 - 6) 藤原健・竹村幸祐・鈴木智子 (2014). 笑顔が人をダメにするとき: 受け手の創造性に対する影響と接近・回避志向による調整効果 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 176. *ポスター発表(同志社大学)
 - 7) Uchida, Y., Takemura, K., Fukushima, S., Saizen, I., Koizumi, N., Kawamura, Y., & Yoshikawa, S. (2015, February). Farming, but not fishing, cultivates shared culture within a community. Poster session presented at the 2015 SPSP (Society for Personality and Social Psychology) Preconference "Advances in Cultural Psychology", Long Beach, CA.
 - 8) Suzuki, S., Takemura, K., & Hamamura, T. (2015, June). Effects of the focus on goals versus processes of actions on consumers' perceptions of service recovery efforts. Presented at the Naples Forum on Service 2015, Naples, Italy.
 - 9) Yuki, M., & Takemura, K. (2015, August). Differential relational mobility generates qualitatively different group processes. In J. Liu (Chair), Exploring the nature of collectivism: From relationships to benevolent authority and collectivistic independence, shaping creativity, prejudice, and depression. Symposium conducted at the 2015 conference of Asian Association of Social Psychology, Cebu, Philippines.
 - 10) Heine, S., Cheung, B. Y., & Takemura, K. (2015, August). Cultural influences on sleep in Japan and Canada. Paper presented at the 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology And 52nd Annual Convention of the Psychological Association of the Philippines (PAP), Cebu City, Philippines.
 - 11) Suzuki, S., Hamamura, T., & Takemura, K. (2015, October). Cultural differences in indulgent consumption: The influence of emotion reappraisal tendency. Paper presented at the International Conference of Asian Marketing Associations 2015, Waseda University.
 - 12) 竹村幸祐・内田由紀子・福島慎太郎 (2015). 共有される文化と生業: マルチレベル分析による検討 日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム「こころに及ぼすマクロな影響を測る: 心理・社会・文化への量的アプローチ」(企画: 竹村幸祐・内田由紀子) (名古屋国際会議場)
 - 13) 竹村幸祐・鈴木智子 (2015). 職場流動性は相互協調・相互独立性および調整・影響志向と関連するか? 日本社会心理学会第 56 回発表論文集, 25. *口答発表(東京女子大学)
 - 14) 中山真孝・竹村幸祐・内田由紀子 (2015). マインドワンダリング傾向と職場での提案行動との関連: 認知心理学と社会心理学の観点から 第 13 回日本ワーキングメモリ学会大会 *口頭発表(京都大学)
 - 15) Takemura, K., & Ishiguro, I. (2016, July). Does having unusual tastes lead to being isolated? Moderating effect of relational mobility. In K. Ishii (Chair), Recent cross-cultural and within-cultural findings on social orientation. Thematic session conducted at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
 - 16) Takemura, K., Hamamura, T., Guan, Y., & Suzuki, S. (2016, July-August). Disentangling effects of society-level wealth and individual-level wealth on independence: An examination through regional differences in China. In A. K. Uskul (Chair), Economic environment as part of our ecology: Its role in who we are, how we think, and what we do. Symposium conducted at the 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan.
 - 17) Heine, S. J., Cheung, B. Y., & Takemura,

- K. (2016, July-August). Cultural influences on sleep in Japan and Canada. In D. Sherman (Chair), Culture, psychological threat, and health. Symposium conducted at the 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan.
- 18) Fukushima, S., Uchida, Y., Takemura, K., & Hitokoto, H. (2016, July-August). Collective happiness: Community social capital reinforces the association between one's own happiness and one's neighbors' happiness. Paper presented at the 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan.
- 19) Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima, S. (2016, July-August). Farming cultivates a shared culture within a community: Examining the macro-level effects with multilevel analysis in farming and fishing areas. In A. K. Uskul (Chair), Economic environment as part of our ecology: Its role in who we are, how we think, and what we do. Symposium conducted at the 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan.
- 20) 竹村幸祐 (2016). 集合知を支える相互独立文化: 文脈効果の検討 日本社会心理学会第 57 回発表論文集, 34. *口答発表 (関西学院大学)
- 21) 金子祥恵・内田由紀子・中山真孝・竹村幸祐・伊藤篤希 (2016). 自己価値の随伴性と職場の価値観との不一致が従業員に及ぼす影響 日本社会心理学会第 57 回発表論文集, 3. *口答発表 (関西学院大学)
- 22) 打田篤彦・内田由紀子・一言英文・竹村幸祐 (2016). 地域の価値の共有感と社会関係資本 日本社会心理学会第 57 回発表論文集, 177. *ポスター発表 (関西学院大学)
- 23) Takemura, K., Hamamura, T., Guan, Y., & Suzuki, S. (2017, March). Disentangling effects of society-level wealth and individual-level wealth on independence: An examination through regional differences in China. In D. Sherman & H. Kim (Chairs), Individual and collective shaping of psychology: Multilevel analyses of responses to societal challenges. Symposium conducted at the 2017 International Convention of Psychological Science, Vienna, Austria.
- 24) 鈴木智子・竹村幸祐 (2017). ダイバーシ
ティによるイノベーションへの影響: 『普遍的-多樣的』リーダーの調整効果 日本商業学会第 67 回全国研究大会
- 25) 竹村幸祐・福島慎太郎・内田由紀子 (2017). 規範が協力的行動を支えなくなる条件: 個人の住居流動性 vs. コミュニティの住居流動性 日本社会心理学会第 58 回発表論文集, 52. *口答発表 (広島大学)
- 26) 内田由紀子・一言英文・箕浦有希久・竹村幸祐・福島慎太郎 (2017). 町の開放性を支える結束型ソーシャル・キャピタル 日本社会心理学会第 58 回発表論文集, 5. *口答発表 (広島大学)
- 27) 箕浦有希久・内田由紀子・一言英文・竹村幸祐・福島慎太郎 (2017). 年金生活者は移住者に開放的か? 自尊感情の 2 側面 (自己評価・自己受容) に注目して 日本社会心理学会第 58 回発表論文集, 110. *ポスター発表 (広島大学)
- 〔図書〕(計 5 件)
- 28) 竹村幸祐・結城雅樹 (2014). 文化への社会生態学的アプローチ 山岸俊男 (編著) 文化を実験する: 社会行動の文化・制度的基盤 勁草書房 pp. 91-140.
- 29) 竹村幸祐・鈴木智子・藤原健 (2014). サービスの実証的合理性理解: 定量心理学調査 小林潔司・原良憲・山内裕 (編著) 日本型クリエイティブ・サービスの時代: 「おもてなし」への科学的接近 日本評論社 pp. 97-113.
- 30) 鈴木智子・竹村幸祐 (2014). 日本型クリエイティブ・サービスのグローバル展開事例 小林潔司・原良憲・山内裕 (編著) 日本型クリエイティブ・サービスの時代: 「おもてなし」への科学的接近 日本評論社 pp. 153-171.
- 31) 竹村幸祐・横田晋大 (2016). 集団間関係 北村英哉・内田由紀子 (編著) 社会心理学概論 ナカニシヤ出版 pp. 183-206.
- 32) 竹村幸祐 (2018). 文化 松田幸弘 (編著) 経営・ビジネス心理学 ナカニシヤ出版 pp. 195-208.
- 〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)
取得状況 (計 0 件)
- 〔その他〕
ホームページ等
https://sites.google.com/site/kosuketakemura/profile_jp
6. 研究組織
(1) 研究代表者
竹村 幸祐 (KOSUKE TAKEMURA)
滋賀大学・経済学部・准教授
研究者番号: 20595805